

(N₂; 他物と分離可能な独立して存在するもの。N₃; 立体のまわりをとり囲むことのできるもの。)

● おおう / [N₁ガ N₂ヲ N₃デ_____]

「N₁がN₃を使って、N₂の露出部分を無くすこと」

／ [N₁ガ N₂ニ N₃ヲ_____]

「認識上の意味は上に同じ」(この文型は、一般的ではない)

／ [N₃ガ N₂ヲ _____]

「N₃がN₂の露出部分を無くすこと」

以上のようにまとめてみたが、「露出部分」という概念を規定しておく必要があると思うので、最後に付け加えておく。上の記述において「露出部分」とは、外部から見えている部分、あるいは外部からなんらかの影響を受けている部分という意味である。

言語経歴：1959年7月愛媛県八幡浜市生。0歳～4歳八幡浜市。4歳～18歳松山市。18歳～東京都目黒区。
(東京都立大学学生)

まわる・めぐる

川 嶋 秀 之

1. はじめに

「まわる」と「めぐる」は移動をあらわす用法として、次のように用いられることがある。

- (1) 昭和十二年頃、四国に遊びにいった時に、春休みだったが、室戸岬で若い巡礼姿の女性と道連れになった。この秋には結婚するのだが、まだ札所を廻り終っていないので、今巡っているのだということだった。(池田弥三郎『おとこ・おんなの民俗誌』講談社文庫 1974 P. 168)

この例では「廻り」を「まわり」、「巡り」を「めぐり」と読ませて区別しているが、これを入れかえて「巡り終っていないので、今廻っているのだ」としても、あまり違和感を感じない。ほぼ同じ意味のようであるが、この二つの動詞に意味の違いはないだろうか。

2. 分析

2.1. まわる

最初に「まわる」から検討してみよう。

- (2) コマ(独楽)がまわる。
(3) 風車がまわる。
(4) モーターがまわる。

これらはいずれも軸がそれぞれのものの真中にある、その中心軸が回転するものである。中心軸の回転にともない、(2)(3)のように中心軸に付随したまわりの部分がいっしょに回転するものもあれば、(4)のように固定されていて回転しないものもある。これらは物についてであるが、人についても用いられる。

- (5) バレリーナが片足でまわる。

これは、バレリーナが片足を中心軸にして回転運動をすることである。以上の諸例には「めぐる」は、現在、使われないようだ。「まわる」「めぐる」に対応する他動詞、「まわす」「めぐらす」でも、それは同様である。

- (6) 日傘を くるくる まわす。
(7) *日傘を くるくる めぐらす。

以上から「まわる」の特徴として、中心軸を持って回転運動をする、ということが言えよう。

次のような例もある。

- (8) 北極星を中心に 星がまわる。
(9) みずすましがまわっている。
(10) とんびが 輪をかいてまわる。

(8)はシャッターを開け放して撮った写真を思い浮かべていただきたい。中心にある北極星は動かず、そのまわりを他の星が円運動の軌跡を描くのである。(9)(10)の例は、中心軸または中心となるものが存在しない場合で、これらの例では中心軸が回転しなくても、また、中心が存在しなくても、要するに、移動したあとの軌跡が円形であれば「まわる」が使われることを示している。

また、

- (11) 運動場をまわる。
(12) 早朝マラソンで 町内をまわる。
(13) 山の手線を 電車がまわる。

の例では、(11)は普通楕円形であり、(12)(13)は厳密な意味でなくても、円形をなしているとは言いがたい。「まわる」は、その軌跡が円形でなくても使えるようだ。

つまり、起点から出発してまた起点へもどるという移動で、その軌跡に囲まれた部分が面積を持たばよいのである。面積を持たないか、面積を持ってもそれが甚だ小さいと、直線的な「行ってもどる」行動になって「まわる」は使えなくなる。

(14) 御用を 聞いて まわる。

(15) 挨拶を して まわる。

(16) ヒトラーは飛行機でドイツ中をくまなく演説して廻った。(美濃部亮吉「苦悶するデモクラシー」角川文庫1973 p. 251)

(17) 幕府の末の時に、この帳面(小さな横帳)を持って、覺にして、方々説いて廻った。(『海舟語録』講談社文庫1975 p. 74)

これらの例になると、起点より出発してまた起点にもどることは、あまり重要でなく、むしろ、順を追って次から次へ移動するというところに重点がおかれている。

(18) 盃が 宴会の席を まわる。

では、宴会の座の中、次から次へ盃が送られることをいう。この意味は抽象的なものにも使われる。

(19) 順番が まわる。

以上から、「まわる」の意味として、「内部に面積を持つ形を描いて移動する、あるいは、次から次へと移動する」という特徴があることがわかる。また、

(20) 時計が 十時を まわる。

は、長針の弧を描く運動から使われるようになった言い方である。

こうした「弧を描く移動」は、目的地に直線的に進まず迂回する移動を示すことができる。

(21) 敵の背後へ まわる。

(22) …おれはその餌をサッカーの選手よろしく、前肢で交互に前へドリブルしながら、表の犬小屋から猫どもの巢喰う裏の方へ廻っていった。(井上ひさし『ドン松五郎の生活』新潮文庫1978 p. 142)

(23) 次の窓口へ おまわりください。

(24) 友達の家を まわって 帰る。

(21)(22)の例で、その移動の軌跡は、ほぼ半円の弧を描くであろう。(23)は直線的移動であっても、Aという窓口が直接の目標となるのではなく、そこを經由、迂回して目的のBの窓口へ進むので「まわる」が使われるのである。

次に「まわる」の下接する複合動詞を見てみよう。

(25) 走りまわる。

(26) はねまわる。

(27) うろつきまわる。

(28) ころげまわる。

他にも「かけまわる」「どなりまわる」などがあるが、これらは、一定範囲における「まわる」の前項の動詞の動作をいったものであり、(14)~(17)にあげた例との関連が感じられる。ある範囲にわたって、それぞれの動作が及ぶことをいうのである。以上の「まわる」からの転用として次の例がある。

(30) 気が まわる。

(31) 酔いが まわる。

(32) しびれが 全身に まわる。

これらはすべて、「気」なり「酔い」なり「しびれ」がすみずみまでよく行きわたるということで説明できよう。なお、「目がまわる」というのは、目自体がぐるぐると回転しているように感ずることを表現したもので、(2)~(4)の例に関連し、また、「おまわりさん」というのは(11)~(17)の例の意味より命名されたものであることを付け加えておく。

以上から「まわる」の特徴をまとめると、

i 回転運動をする。

ii 内側に面積を持つ形、あるいは、弧の形を描いて移動する。 iii 順を追って次から次へと移動する。

iv はたらしがくまなく及ぶ。

の四点になるかと思う。

2. 2. めぐる

ここで「めぐる」の用法について考えてみよう。「まわる」のところであげた例については、すべて「めぐる」を使うことはできない。このことは、「めぐる」に「まわる」の特徴としてあげた、回転運動、円・弧の軌跡を持つ移動という意味がないことを示している。では、「めぐる」はどのように使われるか、次にその例を見よう。

(33) 月日が めぐる。

(34) *月日が まわる。

(35) 季節が めぐる。

(36) *季節が まわる。

(37) 因果が めぐる。

(38) *因果が まわる。

以上の例は「めぐる」が使えて「まわる」は使えない。これらの「月日」「因果」「季節」に共通な点は何かということ、それはともに連鎖循環をなしているということである。(33)はその月や日がひとつひとつ連続して時間とともに経過し循環すること、(35)は春・夏・秋・冬が循環することをいう。(37)の「因果」は、原因があ

って、時間が経過してから結果がやってくる、つまり、原因と結果が相合してはじめて完結する連鎖循環をなしているといえる。

(39) *春が めぐる。

(40) 春が めぐってくる。

(41) *八月十五日 またあの日が めぐる。

(42) 八月十五日 またあの日が めぐってくる。

(39)(41)は、「八月十五日」「春」ともに一年という連鎖または季節という連鎖の一部であって、それ自体が循環するのではないから「めぐる」は使えないのである。「めぐってくる」だとおかしくないのは、一年なり四季という時間の連鎖を経て「八月十五日」という日、「春」という季節がまたやってくるという意味になるからである。もちろん、これには「くる」という動詞の意味がかかわっている。「めぐりあい」という熟語は、こうした年月の連鎖を経たのちで出逢ったということである。したがって、

(43) *別れて 二日後に めぐりあった。

のように短い時間の経過では用いられない。

また、「めぐる」には次のような用法がある。

(44) 城の周囲を 堀が めぐる。

(45) *城の周囲を 堀が まわる。

(46) 金閣を めぐる 赤松の山々。 (三島由紀夫
『金閣寺』学研国語大辞典より)

(47) *金閣を まわる 赤松の山々。

(44)(46)の例は、まわりをとり囲んでいるという状態をあらわす。この差は、たとえば、

(48) 堀が めぐっている。

(49) 堀が まわっている。

と「～ている」を下接させるとはっきりする。すなわち、(48)では、(46)と同じように状態をあらわすのに対し、(49)では状態をあらわさず、しいて言えば「堀」という人が「まわる」という動作を反復・継続している意味になる。

こうした「めぐる」のとり囲む状態をあらわす用法から派生したものに、

(50) 公害問題を めぐる 討論。

(51) 漱石を めぐる 人々。

のように「～に関する」という意味がある。これも「まわる」では置き換えられないものである。

「めぐる」には、ほかに「まわる」と重なる用法もあるが、それは2.3.で扱うことにして、以上の「めぐる」の特徴をまとめると、

- i 連鎖体系を持つ時間の経過をあらわす。
- ii 状態・関連をあらわす。

の二つになる。

2. 3. 「まわる」「めぐる」

以上に述べてきたように「まわる」と「めぐる」には、用法にかなりの差がみられる。しかし、同じ文脈の中で用いられるものもある。それらの差は、いったい何なのだろうか、以下に見ていきたいと思う。

(52) 血が 体の中を まわっている。

(53) 血が 体の中を めぐっている。

(52)と(53)の違いは、(52)は血液の流動運動としてとらえ、(53)は血液が全身の血管を通っている状態として把握していることにある。(51)～(52)にあげた「酔いがまわる」「しびれがまわる」などは「めぐる」で代用できないが、それは酔いやしびれが一時的に体中を進行する現象であって、血のような恒常の状態をもつものとは異なるからであろう。

(54) 星が 空を まわる。

(55) 星が 空を めぐる。

(54)や前出の(8)の例では、星が空を運行することに重点を置いているのに対し、(55)の例は特に星が運行することを意識しているとは言えない。「めぐる」には「まわる」のように、「次から次へと移動する」という特徴がない。スムーズに進行するものには使いづらいのであるが、星のようにその動きが意識されないほど緩慢なものには使用可能である。したがって(54)と(55)では後者の方がよりふさわしいといえる。

(56) いくたの戦場を まわってきた つわもの。

(57) いくたの戦場を めぐってきた つわもの。

(57)の例は(56)の例と較べて、時間をかけてひとつひとつの戦場を経てきた、遍歴してきたという感じが強い。「めぐる」は、いわば、時間の方に着目するのであって、(57)の例は移動よりも経てきた時間に重点を置いたものと言える。「諸国をへめぐる(経巡る)」の「めぐる」はこの意味である。

(58) 佐渡ヶ島まわりの 船が 出る。

(59) 佐渡ヶ島めぐりの 船が 出る。

(58)は船の運行するコースの経由地を示す用法で、「佐渡ヶ島経由の船が出る」と言いかえることが可能である。それに対して、(59)は佐渡ヶ島を探訪するための船のことであって、上のように言いかえることができない。「まわる」は移動をあらわすが、「めぐる」には単なる移動ではなく探訪するというニュアンスがこもっている。おそらく、この探訪するというニュアンスは(57)の例のような時間をかけるということからきているからであろう。

(60) 東京から アンカレジを まわって ロサンゼルスへ 向かう。

(61) 東京から アンカレジを めぐる ロサンゼルスへ 向かう。

(61)の例も同様であって、アンカレジで降りて町を尋ねてからロサンゼルスへ向かうことになってしまう。

以上より「まわる」「めぐる」がいっしょに使われる場合の違いをまとめると、「まわる」は移動することに意味の中心をおき、「めぐる」は状態や時間に意味の中心をおく、そして、探訪のニュアンスをこめることがある、ということになる。

2. 4. 文体差など

例(18)で「盃がまわる」という用法をあげたが、これは有名な土井晩翠の「荒城の月」では、

(62) めぐる盃影さして昔の光今いづこ

というように「めぐる」が使われている。この詩は文語によって構成されており、「盃がめぐる」というのは文章語的表現である。現在の口語では、「盃がもうめぐってきた」などはちょっと言いづらいのではないだろうか。この文章語的な感じは前章であげた「めぐる」の諸例にも感じられる。

(63) 中心に燃える一本の蠟燭の火照に

めぐりつづける廻燈籠 (『伊東静雄詩集』新潮文庫 1975 p. 124)

これも「まわりどうろう」というように、口語の世

界では「まわる」を使うのが普通である。

しかし、現在「まわる」であらわされる意味を、かつては「めぐる」もになっていたのである。

(64) …大井の土民におほせて水車を作らせられけり。
多くの足を賜はりて日数経て営みいだしてかけたりけるに、おほかた巡らざりければ、とかくなほしけれども、つひに廻らで、いたづらに立てりけり。

の例が『徒然草』五一段にあって、「まわる」「めぐる」とも水車の回転に用いられている。また、『古事記』では

(65) 然らば菩と汝とこの天の御柱を^つ行き廻^りり逢ひて…。

というように「廻り」を「めぐり」と訓読している(岩波文庫1976 p. 20による。『古事記伝』の訓読も同様。)。その「めぐる」が、次第に「まわる」にとって代わられるようになったのであって、次の例はその間の消息を語っている。

(66) 御菜ヲメクリト云 常ニヲマワリト云ハワロシ
(『蜚藻屑』1420年成立。井之口有一他編『尼門跡の言語生活の調査研究』1965 p. 574より)

言語経歴：1955年11月 茨城県日立市生 0歳～23歳 日立市 23歳～24歳
茨城県真壁郡明野町 24歳～東京都目黒区
(東京都立大学院生)

はずむ・はねる

村田ひろみ

1. はじめに

「はずむ」「はねる」は、国立国語研究所1964の「2. 1523走り・飛び・流れなど」の項に分類されている。徳川・宮島1972の「はねる」の項では次のように述べられている。

「はずむ」は主体自身に弾力のあるばあいについていう。たとえばゴムまりのように。「足がはずむ」のような表現もあるが、これは「話がはずむ」「心がはずむ」などの比喩的な表現にちかいものだろう。「はねる」はまりでも、ウマ・ウサギなどの動物でも、火ばなやドロでもいい。つまり弾力がないものにもつかえる。

というように、「はずむ」と「はねる」の違いにつ

いては、主体の性質の違いをあげている。「はずむ」と「はねる」の違いは、この点だけなのか、動作の形態などに相違はないのかということに疑問を感じたので、この二語を比較しながら分析してみようと思う。

2. 自動詞の「はずむ」「はねる」について

2. 1. 動作の形態

まず、「はずむ」を考えてみよう。

(1) まりが 石にぶつかって はずんだ。

(2) まりが 床で はずんだ。

(3) *まりが 天井で はずんだ。

(4) ぼんという乾いた音がしていくつも紙の筒がテーブル下へ落ちる。そしてちょっと弾む。(中